素描

高津邦英

駕籠町

五中が焼けたのが四月一三日であることを去年、石田雅男（以下敬称略）から初めて聞いた。その後、米軍発表の資料で再確認したのだが、それによると、一三日深夜二三時から空襲が始まり、例の四発爆撃機の数は三五二とある。豊島区のほか板橋、王子、四谷、渋谷などが襲われた。

石田は親切な人物で、五中に入って間もなくの頃、一Aの私たち数人を巣鴨のトゲ抜き地蔵へ案内してくれた。後の名狂言師、野村万作もいっしょだった。自宅にまで招いてくれた。そこで岡本一平全集を初めて見た。少々きわどい絵があった。一平は、かの子の夫であり、岡本太郎の父親である。当時は「隣組」の唄の作詞者としても有名であった。

私はまだ御茶の水界隈の駿河台にいた。愛知県への疎開が決まり、一年生修了の書類を担任の成田さんから受け取っていた。ただ汽車の切符が手に入らなかったのである。いわば「疎開浪人」であった。

駕籠町から巣鴨へ抜ける都電を使って、板橋の軍需工

場に勤めていた父親から五中焼失を聞いた。翌一四日か一五日か、駆けつけるという気持ちで家を出た。

校舎は焼け落ち、二階建ての講堂だけが、煤だらけの外壁を残して視界をさえぎっている。わきを抜けてグラウンドへ向かう足がすくんだ。直径数メートルのすり鉢状の穴が掘られ、一抱えもありそうな不発弾が斜めに突きささっていた。周囲に何人かの顔があったと思うが、「一トン爆弾かなあ」という声が聞こえた。

当時は物理、化学、生物はまとめて「物象」という耳なれない科目になっていた。物象担当の田中さんは、短く刈りあげた細おもてそのままに、エッグという愛称であった。

黒板に、日米独英の軍用機の機影を描いた。一番重い爆弾は一トンであり、焼夷弾には油脂、黄燐、エレクトロンの三種類があるとも教えてくれた。

黄燐の実験が印象深い。この危険な物質は空気中で自然発火する。水を満たした小瓶の底に、黄色くサイコロ状に沈んでいた。

手順は忘れたが、少量を濾紙に塗り、グラウンドにヒモを張って、洗濯ばさみで一枚ずつつるしていった。遠巻きに見守るうち、やがて二〇枚ほどの濾紙が乾燥し、いっせいに白い炎をあげた。

理科室の背後の壁に、元素の周期表が貼ってあった。最後がまだ、ウラニウムの時代である。「隣りの理化学研究所では、仁科芳雄博士がウラニウム爆弾を研究中である。ただしこれは極秘だ」とエッグ氏は声をひそめた。ヒロシマ・ナガサキの一年前である。

駿河台

私が住んでいた駿河台は、一度の被弾もなかった。理由についていろいろ憶測があるが、真偽は不明である。

夜襲の恐怖は味わった。防空頭巾をかぶって御茶ノ水の橋へ出た。近所の男女も集まって来た。家にいるのが怖ろしいのである。

三月一〇日、本所、深川が襲われるのも橋の上から見た。三三四機（米軍発表）は、サーチライトの交錯の中に、青白く、ひとつなぎの帯のように見える。その帯から無数の火の粉のようなものが、剥がれ落ちて行った。やがて闇の底から赤い炎が噴きあがった。

神保町界隈の空が赤く染まった夜は、ひとりで坂を駆け下りた。一帯は小学校の同級生の家が集まっている。瀬戸物屋の店内に炎が渦巻き、陶器の爆ぜる鋭い音が響いていた。同級生の家である。あたりに人影はなく、無人の世界に、家だけが軒を連らねて火を噴いていた。

駿河台で焼け出されなかったことに、一種のうしろめたさが残る。三月一〇日の被災の写真を後年見たときにも、居たたまれない思いがあった。ナガサキの少年の写真を見て呆然となったこともある。炭化した足先は粉に

なって崩れていた。

塩　田

愛知県南部の三河湾に沿って、吉良（きら）という半農半漁の町がある。付近の小高い山から昔、雲母（きら）や石英が採れたのが地名の由来だという。

内陸へ向って水田や畑が拡がり、一帯が、忠臣蔵で有名な吉良上野介の領地であった。地続きに西尾という小さな町があって、母親の生地である。両親と三人でたどりついたのは、六月に入ってからだった。

前年の三月に共立を出た姉が、地元の女学校に教職の口を得て、妹と弟を連れ一足先に疎開していた。家族六人が一年ぶりに再会したことになる。父親は勤めがあるので東京へ戻った。

麦秋という言葉があるが、西尾中学の二年生に転入すると、待っていたのは授業ではなくて麦刈りであった。出征兵士の留守宅の応援である。

夏になると、電車で吉良の塩田へ通うことになった。

暖かい内海での製塩の歴史は古い。吉良と対立していた赤穂もそうだし、仙台近くの塩釜という地名にもその名残りがある。西尾も、昔は煮塩と書いた。

吉良駅で降りて二〇分ほど歩くと堤防にぶつかる。堤防の外へ一画、高いコンクリートの外壁に守られて塩田があった。

堤防から見下ろす光景は、文字どおり塩造りの田んぼである。四角い形が整然と並び、溝で仕切られている。稲田と違い、塩田を埋めているのは砂であり、溝には外壁の穴から取り入れる海水が、静かに流れていた。

夏の陽ざしが海水を蒸発させ、塩の結晶が砂粒を包む。その砂粒をフルイに盛り、上から海水を掛けて結晶を溶かす。濃い塩水が瓶（かめ）に垂れ落ちて来る。

濃く重い塩水を桶に汲み、天秤棒で肩にかつぎ、堤防の小屋まで百メートルほど運ぶ。鉄の釜に移し、煮詰める。苦汁（にがり）を含んだ粗塩（あらじお）が出来る。理屈は簡単だが、中二の細い体にはかなりの重労働であった。

おまけに、毎日のようにグラマン機が頭上をかすめた。内陸の飛行機工場を襲うのである。

魚網の切れ端に、堤防の夏草をたっぷりしばりつけ、珍妙な頭巾をつくる。爆音が聴こえて来ると、それをかぶって砂の上に伏せる。パイロットの顔が見えるほどの低空であった。工場では、姉が担任する西尾女学校の生徒に犠牲者が出た。

間の抜けたような田園の風景に、恐怖が同居していた。八月一五日まで、それが続いた。

正午の放送は、手近かにラジオがないので吉良駅まで歩いた。白いサラシの六尺フンドシにワラぞうりである。重大放送だというので半袖シャツを肩に掛けた。

放送は、駅が拡声器で流した。耳なれない言葉が並び、おまけに雑音がひどい。教師に聞いても要領を得ない。無条件降伏の報だとは誰ひとり気づかなかった。

夏祭り

年が明け（二一年）、中三になってからすこしずつ勉強に身が入った。数学、物理、化学などの理科系の科目に興味があった。

夏休みに入り、近在の祭りが復活した。一〇人ほどの気の合った友達が、順々にそれぞれの夏祭りに招き合った。数人の教師が合流した。東大哲学科出身の徴兵忌避者や名大を出て三菱重工で飛行機の設計をしていた男など個性豊かな人たちである。

酒盛りが始まるのである。誰やらがドブロクとイモ焼酎を持参した。食べるものは、行く先々の母親の手料理であった。都会では考えられない状景である。酒宴の合間に、知らなかった戦争の知識を教師たちから得た。夏祭りが終戦祝賀会であった。

一高水泳部

昭和二二年（中四）の暮、思わぬことが起きた。父親が急逝したのである。満五〇才寸前のことであった。

翌二三年春には旧制高校の受験が控えている。迷ったあげく「受けて見たら」の母親の一言で踏み切った。

幸い旧制一高の理科乙類（医学部コース）に四修で合格できた。全寮歓迎コンパのとき、五中一Aの同級生、山崎圭次郎（東大名誉教授）と再会した。工藤敦夫（元法制局長官）がいたことは後で知った。

合格発表のとき、背のヒョロ長い男が中背の二人と共に声をかけて来た。丸刈りの無帽だったが、汚いマントをはおって異容である。水泳部の勧誘であった。西尾までハガキが追いかけて来た。

ヒョロ長かった人物は、旧制医学部に二番で入った秀才で、都心の大きな病院を再建し、名誉院長になった今も肥体を持て余しながら内科外来で活躍している。私も女房も長くお世話になっている。後年、一Aの井上喜美雄が、その病院で人間ドックの非常勤医師になった。

ヒョロ長かった人物と同じ三年生であった今井敬さんが、今の経団連会長である。酒の入ったコンパのあと数人で、混み入ったクイズをガヤガヤと解いていた。やがて謎が解け私たちは散りかけた。一人だけ動かない男がいる。わきから「何だ今井、まだ分かんないのか」と、からかう声が飛んだ。新入生が敬遠する四年生（留年）で、水泳部の主である。

今井さんは四年生に顔を向け「違うよ。解を文章で書くとどうなるかを考えているんだ」と静かに言った。四年生は鼻白み、私達の足もとまった。思いもかけない発想であった。

本格的な水泳の練習が始まり、六月に入り体の異常を覚えた。夜は寝汗をかき出した。肺結核である。医師の指示で、愛知県へ帰省せざるを得なかった。

再　会

一高に入った春、渋谷のハチ公の島に「社会党公認・成田喜英」のノボリを見て混乱した。初めての東京都教育委員の公選である。成田さんは二位で当選している。

昭和二一年の夏休みに上京し、雑司ヶ谷の成田さん宅を訪ねた。手巻き煙草をくゆらす成田さんの口から、思いがけない言葉が出た。

「君は今度の戦争をどう思っているのか」

中学一年の私たちは、軍人勅諭を読まされ、木銃を片手にホフク前進を校庭で強いられた。現役の青年将校が配属され、校長より先に朝礼の訓示をするようになった。

ある朝、A組の数人がサボタージュをして教室に残った。私も便乗した。不意に戸があき、蒼白な顔の成田さんが踏み込んで来た。

「君たちはいったい何をしているんだ」

ある日の授業に、成田さんが白い和紙を丸めて持参した。延ばして鋲で黒板にとめた。数十人もの墨の署名が並び、それぞれの下に赤黒い血液の指紋があった。軍需動員されている、上級生たちからの「檄」である。

八月一五日を、小学校から大学に至るまで、教職にいた人たちはどういう気持ちで迎えたのだろうか。

成田さんは生徒に対し「お前呼ばわり」はしなかったし、手を挙げることもなかった。社会党への転身は誠実さの表現だったのだろう。後年、高校教師になった私も、もし戦争中だったらと考えると言葉を失う。

それにしても「君は今度の戦争をどう思うか」の一言は、酷であった。私たちは、自分の頭で物事を判断することを長い間禁じられていたのである。

療養そして大学

以下年譜風に。

昭和二三年六月、療養生活。健康保険なく医者にかかれぬ。ブラブラするのみ。卵だけは安くて豊富。

夏、一高事務局から通知が届く。二年生以上は旧制のまま、一年生は翌年発足する新制大学を受験せよ。GHQの指示。戦争中も戦後も、権力は理不尽なり。

九月と翌年三月、微熱を押して上京、定期試験を受ける。一年修了なしには新制大学の受験資格を失なう。

二四年春、新制大学。受ける体力も気力もない。疲労感甚だしく、荷物は寮に置いて帰省。療養生活に戻る。

二四年夏、世情騒然。国鉄のリストラをめぐり怪事件つづく。下山総裁の怪死。三鷹駅での無人電車暴走。福島県松川地区での貨物列車脱線転覆。

帝銀事件の余韻、収まらず。前二三年一月事件発生、一

二月、北海道で容疑者平沢逮捕。

これら四事件、後年、松本清張が「日本の夜と霧」で分析。アメリカCIA説に説得力あり。五〇年経過。アメリカ政府は情報公開するや否や。

父親の死に伴い経済逼迫、肺結核、旧制から新制への強引な切換え。翻弄という言葉が浮かぶ。左翼の影響受ける。

昭和二五年春、新制東大合格。文科一類（法・経）。「資本論」念頭にあり。駒場の同じクラスで一Aの助川精一と再会。

メーデー事件

二五年夏、「代々木」に「入党」。後年、「日本共産党」に激しい嫌悪感。

昭和二七年五月一日、いわゆる「血のメーデー事件」で逮捕・起訴。小菅拘置所へ。

拘禁者には一日一時間の運動あり。「特殊犯」は屋上。最初の日、帝銀・平沢、三鷹・竹内と会い驚く。

平沢、霜降りの詰襟服。後手を組み、悠然と近付く。私たち一〇人ほどのわきを通り過ぎざま一言。「アイロニーのロは、Rだったか Lだったかなぁ」。平沢にとって何がIRONYなのか。毒気に当てられる。

竹内、高い金網塀の裾に蜘蛛のようにしがみつき、中庭を見下ろす。一般囚がソフトボールをしている。脳腫瘍の徴候ありしか。

昭和二八年三月一〇日、保釈。タバコ美味なり。十ヶ月ぶり。

二八年四月から二九年一二月まで、常任（職業）革命家を強いられる。僅かな給料。朝食は記憶無し。昼食はコッペパンひとつ、夕食はラーメン。やがて意見の対立から「右翼日和見主義者」として「活動停止処分」。

「脱党届」受理されず。労働者・農民出身の幹部養成が唱導される。大学生には陰湿な差別あり。スパイ容疑で軟禁された学友二人。

昭和三〇年一月。代々木中央、「極左冒険主義の全面的自己批判」と「被処分者の名誉回復」を発表。

怒りと虚脱感。フルシチョフのスターリン批判の追討ち。代々木解体状態。しばらく睡眠薬を手放せぬ。

文　学　へ

私を救ってくれたのは文学である。椎名麟三、武田泰淳、梅崎春生、埴谷雄高といった人たちから得たものは測り知れない。二八才になって始めて、人間・社会を見る新しく、異質な眼を得た。アルバイトをしながら、小説を読みふけった。

昭和三三年三月、東大法学部政治学科を卒業。駒場から八年在籍。依然アルバイト。

昭和三四年春、原水協（原水爆禁止日本協議会）国際

部に就職。一六頁建ての英文月刊誌「ノー・モア・ヒロシマズ」の編集に携わる。千二百部刷り、世界各国の反核団体に送る。

昭和三五年。いわゆる六〇年安保。騒乱罪被告の立場を考え、国会へ近寄らず。下宿でラジオを聴きつづける。女子学生の死を知る。

昭和三六・三七年。社共の対立に嫌気がさし、学士入学。東大英文科を聴講して教員免許を取る。満三〇才。一〇才近くも年下の女子学生の多いのに戸惑う。

昭和三八年。ツテがあり、秘かに某私立高校の英語の教師になる。

昭和四四年。メーデー事件、無罪判決。なんと一七年かかった。一審だけでは史上最長である。長いと言えば確かに長すぎた。翌年、三島が自殺している。

往事茫茫

たくさんの作家に触れて来た。一時期は小説なども書いてみたが、吉行淳之介の散文に会い「読者」に廻った。ついでながら、吉行は、世に言う単なるエロ作家ではない。戦後最高の散文を練り上げた、多才な一流作家である。「ヴェニス・光と影」、「夕暮れまで」、「目玉」などの文章は絶品である。

高校教師の三十余年は語るに長すぎる。二年早く、六三才で退職し年金生活に入った。

心身の老化は避けがたい。総じて今はディレッタントというべきか。好きな作家を読み返し、英語の歴史と語源を調べなおし、スペイン語をかじる。立命館大学名誉教授の白川静さんに啓発され、漢字の起源に興味を抱いている。「白」という字が、シャレコウベの象形文字（三五〇〇年前）だと知って驚いた。

日本も世界も、見当のつかない状況になっている。埴谷雄高が数年前「人類は、少し良いことをして、たくさん悪いことをして来た。これからもそうでしょうね」と語ったのが印象深い。華麗な彫刻に飾られたギリシャ・ローマの歴史も、裏面は、侵略、殺りく、略奪、レイプに満ち満ちている。

日本人も巻き込まれた五〇年前の戦争についても、いわゆる左右の偏見を避け、客観的な歴史的事実としてとらえるには、あと半世紀が必要だろうか。

世界はアングロ・サクソン族と漢民族の対峙が主軸となっている。日本国内はどう表現したらよいのか。これからの一世紀、権力は、両手で砂をすくうだけでなく、指の間からこぼれ落ちる庶民に眼を向けるだろうか。

行手は霧、往事は茫茫、平沢の言うようにアイロニーとでも言うところか。

（一九九九・一一・三〇）